

漱石の虚像と実像

Sōseki's true image as seen in *Kōjin*

Yoko McClain*

Many times since childhood, I have heard my mother speak about my grandfather Sōseki. Since her remarks always concluded with expressions of fear of her father, my image of Sōseki while I was growing up was a frightening one. In later years, as I became more familiar with his work, however, I found him to be a tragically lonely figure. This fact was particularly evident in *Kōjin*, in which he graphically described himself psychologically. *Kōjin* was written when *Sōseki* was seriously afflicted with both neurotic disorders and stomach ulcers. Many of the everyday happenings at home that were related to me by my mother often appear in this work.

It is a known fact that Sōseki attracted a great many students who revered and loved him. One wonders which Sōseki is the true Sōseki—the frightening family man, the lonely human being, or the adored teacher with high ideals. Judging from what I personally heard from my mother and other relatives, and from reading his writings and those of his students, I feel that the true Sōseki

* オレゴン大学準教授

was a complex man who combines all three.

千円札の漱石の写真は大正元年9月彼の45才の時に撮られたものです。数としてもかなりのものを残している上、殊に晩年のものは深みのあるものなので、私達はよく彼がもっと年をとっていたように思うのですが、実はあの写真撮影から4年後に49才という短い生涯の幕を閉じています。今の45歳と言えばまだ中年にも達していないほどの若さと思うのは私自身の年齢にもよるものかもしれませんが、漱石の整った顔には両眼の下に大きなたるみも見え、どことなく憂愁を含む初老の落ち着きさえ感じられます。

漱石の作品には、「道草」のように自叙伝とされているものは勿論の事、他の殆んど作品にも自己の経験や心理描写が所々に挿入されている事は一目瞭然です。しかし、その中でも特に漱石という人間が強く浮き出しにされている作品は、私には何と言っても「行人」であると思われまふ。文学作品というものは著者の生いたちから切り離しても分析出来、アメリカの学会では既に何人かがその線に沿って漱石の作品を研究しています。しかし、正直な事を言って、彼のいくつかの小説、中でも殊に「行人」を読む時、私はどうしても客観性を失ってしまって、一ヶ所、一ヶ所これが彼自身であったに違いないと読んでしまうのです。理由は、やはり若い時から母に、そして親戚の寄り集りの時等には祖母や叔父、叔母に、父親または主人としての漱石について聞かされた上、少し長じてからは自身彼の作品を読んで私なりの漱石像を築き上げ、それがあまりにも「行人」の一郎に近い為かも知れません。そしてこの、私の漱石像と先程言った落書きのあるお札の肖像との間には何だか距りがあるように感じられます。本日はこの短いペーパーで一体どちらが漱石の実像であるかという事について少し考えてみようかと思ひます。

「行人」は文学的には秀れているものとは言えないと思ひます。どんな所がそうかと申しますと、先ず小説全体の構成にまとまりが缺けているという事です。私は、漱石が何か全く違った構想のものを書き出し、途中で気を変

えたという印象まで受けるのです。例えば、第一章「友達」では二郎が大阪へ行き、そこで病院に入った友人三沢から気の狂った若い女性の話を聞かされ、これが後の章で妻直の愛情を疑ぐる一郎の心理につながって行くわけですが、そのつながりがしっくり行っていないように思えます。次作の「心」は三章に分かれています、それ等が皆、なだらかに繋がっており、小説全体の構成が遙かに秀れています。又、夫婦葛藤を克明に画いているにもかかわらず、「道草」の行間にはどこか暖たかさを感じさせるものがあるのですが「行人」にはそんなものもありません。ただ、主人公一郎の苦しみ及び彼を囲む家族全員の憂いがあるばかりです。面白い事に、私は「行人」の、このまとまっていない構成、そして暖かみの感じられない深刻さに人間漱石を見るような気がして、かえってこの作品に魅かれます。というのは「行人」は大正元年12月初めから翌2年11月の間に朝日新聞に連載されましたが、未亡人鏡子の「漱石の思い出」によると、その2年のはじめ、即ち「行人」掲載直後から数ヶ月漱石はひどい神経症、現今の精神科医は精神分裂症、又は重度の鬱病とも呼んでいます、とも角そんな病に悩まされ、その間、常軌を逸した行動が多かったようです。その上、同年4月にはひどい胃潰瘍も併発して9月までこの小説を中断したほど、彼は心身共に病んでいました。これらが小説のまとまりのない、又精神的苦痛だけとり扱った原因であり、ここでも当時の漱石の実像が表われていると言えると思います。

私は前に、主に母から自分の父親につき聞いたと申しましたが、実はその内容の九割が父親が如何に怖かったかという事なのです。全く恐ろしかったという以外何の記憶もないようです。母は今年86才、一年ほど前からかなりぼけてしまい、いろいろな事を忘れてしまっているのですが、昨年漱石のお札が出ました時、私がそれを見せて「これ誰だか分る？」と聞きました所、「ええ、お父様でしょう。とても怖かったわ。」とその事だけはつい昨日の事のように覚えていたので、私もびっくりしました。そんな事で幼い頃は私もこの一方的な話だけを聞き漱石と言う人は単に恐ろしい人に違いないと考

えていました。が後になって自身彼の作品を読むようになり、中でも「行人」を読んだ時、私は母達のいう怖い父親以上に一人淋しく苦しんでいる気の毒な男性を見たと思ったのです。

この小説では種々の人間関係、殊に大学教授一郎と妻直との夫婦関係がえがかれていますが、実はそれが主題ではなく、むしろそれを通して一人の男性の心理状態にメスが入れられています。そしてこれは、とりもなおさず小説の形を借りて漱石自身が自己の肉体と心理を解剖したものです。先ず肉体の事ですが、「行人」のはじめに『あの女』、即ち美しい芸者がひどい胃潰瘍の為、同じく胃を病む三沢と同じ病院に入っています。漱石自身一生胃弱でついに胃潰瘍の為命を失くしていますが、多分その為でしょう。彼の作品にはしばしば胃腸病に冒されている人物が出て来ます。しかし多くの場合その人物が小説の中で特別重要な役割を果たしていないのです。この「行人」でもその芸者の病気が構成上どうしても必要だとは思われず、こんな事も小説全体に締めりをなくさせている一つの原因となっています。胃病という病魔にとりつかれて苦しむ漱石がどうしてもそれを書かずにいられなかったのだと私は想像しています。彼はここで二郎に「潰瘍という言葉は……妙に恐ろしい響を伝えた。潰瘍の陰に、死という怖いものが潜んであるかのやうに。」⁽¹⁾と言わせていますが、これは当時既に4年後に来る自己の死を予想しているような暗示的な言葉です。尚一つ興味のある事はこの胃病が漱石の家庭生活にある特殊な役割を果たしたらしいという事です。「行人」執筆より少ししてから漱石は深刻な鬱病に悩まされ、三ヶ月位後に今度はひどい胃潰瘍に冒された事は前述の通りですが、胃が悪くなると自然と頭の方が少しおさまってくるという話を私は母から聞いた事があります。肉体的苦痛が精神的なものを忘れさせたのかもしれませんが。「道草」では妻のヒステリーの発作が夫婦の緊張した関係を幾分やわらげるただ一つの緩和剤になった事が出て来ますが、漱石の胃病も神経の病の緩和剤だったのではないかと思われまます。妻のヒステリーにしろ夫の胃病にしろ何かそんな激烈なものでもない

限り普通の夫婦の関係さえ築けなかったというのは何と淋しい夫婦であったのでしょうか。

明治36年1月漱石が英国の留学より帰った直後からこの神経の病が起り、これは死ぬまで何回となく戻って来たわけですが、「行人」の頃は殊に悪かったと聞いています。父親がこのように険悪な状態になってくると「お父様の病気」と言って家中で怖がったと母は言っていました。「行人」の中で母親が眉をひそめて「また一郎の病気が始まったよ」⁽²⁾と囁く個所がありますが、漱石自身家族が自分についてこう陰で言っているのを知って書いたに違いありません。思考力が人一倍鋭い彼にとって家人に病気病気が影で囁やかれていた事は自尊心も傷つけられたに違いありません。その直ぐ後でこの病気と呼ばれるものの原因につき、一郎の「性質が氣六づしいばかりでなく、大小となく影で狐鼠々々何か遣られるのを忌む正義の念から出る。」⁽³⁾と書いていますが、このような理由を作って自分に言い聞かせると共に他にもそう公言しなければやまない心境だったのかもしれませんが。漱石自身確かに正義観の強い人だったと思いますが、この場合「正義の念」などと強がりを行っている裏に私はやはり自身の病気を苦ししながら、その不安を家族の者と分つ事の出来ない家庭での淋しい漱石を見るような気がします。

二郎は又、一郎が「激した或時に自分は兄を真正の精神病患者だと断定した瞬間さへあった」⁽⁴⁾と言っています。私はよく母から父親がこんな状態に落ちいった時、総ての行動が正常でなくなったという事を聞きましたが、彼自身充分それを意識していたであろうと思います。才能ある者であるという事を自認すると同時に、そのような者にあるまじき行動を抑制出来ない為、自分が精神病患者でもあるかも知れぬという危惧の念を懐いて苦しんでいたのではないのでしょうか。

「行人」の第三章『帰ってから』の初めに「二郎、己^{おれ}は昔から自然が好きだが、詰り人間^{つま}と合はないので、己^{やむ}を得ず自然の方に心移す譯になるんだらうかな」⁽⁵⁾という一郎のしみりした言葉があります。漱石が肉親の真の

愛情に恵まれず不安な幼年時代を過ぎた事は衆知の通りですが、こういう彼にとって人間という者が暖かい信頼出来るものでなかった事は当然です。

「世の中にすきな人は段々なくなります、さうして天と地と草と木が美しく見えてきます、ことに此頃の春の光は甚だ好いのです、わたしは夫をたよりに生きてゐます」⁽⁶⁾

という大正3年津田青楓宛の手紙でも自然しか愛せなかった傷ましいまでに淋しい一人の人間を見る事が出来るのです。

お重^{しげ}というのは「行人」の中の一郎、二郎の妹なのですが、「お重は……裏表のない正直な美質を持っていたので……兄には無論可愛がられてゐた」⁽⁷⁾という個所があります。漱石は実生活で全く裏表のない正直さを尊重したようで鏡子との見合の為、彼女について「歯並みが悪くてそうしてきたないのに、それをしいて隠そうともせず平気でいるところがたいへん気に入った」⁽⁸⁾と言ったと伝えられています。私の覚えている祖母という人は彼の言ういわゆる裏表のないぎっくばらんの人でしたから、そんならどうしてもう少し二人の間がうまく行かなかつたのだらうと、この箇所を読む度に私は思うのです。実際、熊本での新婚生活は鏡子の強度のつわりの時以外は世間並みに割に平和に行っていたようで、波瀾の多い結婚生活はやはり漱石が英国から帰り、自身ひどい神経症に悩まされ始めてからの事だと考えられます。それを思うと、「行人」の中の

「……嫁に行けば、女は夫のために邪^{よこしま}になるのだ。さういふ僕が既に僕の妻^{さい}を何の位悪くしたか分らない。自分が悪くした妻から、幸福を求めるのは押^{おし}が強過ぎるぢやないか。幸福は嫁に行つて天真^{てんしん}を損^{そこな}はれた女からは要求出来るものぢやないよ」⁽⁹⁾

という言葉はある程度漱石の本心から出たものではないかと思われるのです。世間ではよく私の祖母の事を悪妻と呼んだわけですが、女というものは主人次第で悪妻にも良妻にもなれるのであって、家庭人としての漱石について聞く時、祖母が如何なる妻であったとしても、それは彼女だけの責任ではな

かったと思われます。この点祖母も気の毒だったと思いますが、妻を悪くしたと自覚しながら、なおそうだった彼女を時に憎まずにはいられなかった漱石自身も非常に不幸だったと私は思うのです。私が一番今でも面白いと思っている事は母、叔父、叔母が皆、父親が如何に怖かったかという話を繰返した中で、祖母だけは主人について何一つ不平とかよくない事を言わなかった事です。

「行人」では一郎が二郎と妻直との間を疑る所がしばしば出て来ますが、鬱病の時の漱石は実際に妙に疑り深い目で見たと事で、弟子の人々が電話で鏡子と話したりすると「何の用だ、人の細君を呼び出したりして」とどやしつける事もよくあったそうです。⑩ あれほど教養を身につけていたにもかかわらず人間としてはいつもどこか不安定な自信にかけた人だったのではないのでしょうか。ひっきょう彼自身人を真から信頼出来ない淋しい人であったのです。

「行人」の一番終りに近い所で漱石はHに「^{あなたがた}貴方も兄さんから暖かな光を望む前に、まづ兄さんの頭を取り巻いてる雲を散らしてあげたらいいでせう。もし夫が^{それ}散らせないなら、家族のあなた方には悲しい事が出来るかも知れません。兄さん自身にとっても悲しい結果になるでしょう。」⑪と言わせています。これこそ真面目に助けを求める漱石の叫びであるに違いありません。『頭を取り巻いている雲』、鋭敏な頭の持ち主、しかも鬱病に悩む彼の苦しみは平凡な家族の人々には中々理解されなかったのでしょう。

明治43年8月漱石はあの有名な修善寺の大患をやり、これが彼にある悟りの境地を開かせるに至ったと以前はよく言われました。「思い出す事など」から見ると、回復直後の彼の生活は全く感謝の念に満ちたもののように、これが彼に悟りの境地を開かせたと思わせた一つの原因かも知れません。しかし、それより二年後に書かれた「行人」はそれとは対照的で、悟りを開いた人の作品とは程遠いと思われます。それを考える時、私は一つ面白い事を思い出します。それはたしか昭和25年頃、私がアメリカへ行く一、二年前だっ

たと記憶していますが、母に晩年の漱石が以前よりずっと温やかな父親になっただろうと賛成を求めていました。しかし母は頑として父親は自分の幼い頃から死ぬまで同じ恐ろしい父親で一生少しも変らなかったと主張して譲りませんでした。私の父は最も晩年の漱石しか知らず、その上木曜会の日にだけ彼の書斎に行ったわけですから、自ずと母を初め家族の漱石を見た眼とは違っていたのです。父は自分の会った漱石を崇高な、澄んだ心を持った師と仰ぎ、静かな落着きのある、即ちあのお札の肖像のような漱石だけを覚えていたらしいのです。父母のこの会話を聞いた当時、私は二人の人間の同一の人間に対する見方がこうも違っているのかと大変面白く感じた事を今でも覚えています。

最後に一つ付け加えたいのは「行人」には漱石が晩年「則天去私」という言葉で表わした彼の理想の心境とでも言うものがよく見られると思います。この語は今までに多くの学者、評論家によって研究され、既にいろいろな解釈がなされており、私自身もかなり前ですが、アメリカの大学でこれについて論文を書き、私なりの解釈をしました。今これについて述べる事は不可能ですが、極くかいつまんで言うと、人が何物にも動じない無心の境地に達するという事で漱石自身弟子達に「娘が突然片眼になって目の前に表われても驚かず、それがそういうものであると落着いて見ていられる心境だと言ったという事です。¹²⁾「行人」の最終の章『塵勞』では特にこの則天去私に基づく考えが沢山出てくるように思われます。一例を挙げれば、一郎がHに言う言葉の中に

「君でも一日の中に損も得もいらぬ、善も悪も考えないたゞ天然の儘の心を天然の儘顔に出してゐる事が、一度や二度はあるだらう。僕の尊いといふのは、その時の君の事を云ふんだ……」¹³⁾

というのがあり、この「天然の儘の心」何も考えていない無心の心、人間のあらゆるてらいというものを捨てた瞬間に無意識に到達する境地、これが後に彼が名づけた則天去私の心境であると思います。この他にもこの考えを表

わたしたち個所が多々見られこの点でもこの作品は大事なものと言えると思います。

さて、私の母、叔父、叔母の見た恐ろしかった父親としての漱石は何と言ってもゆるぎない実像であると思います。同時に、宗教的悟りを開いたとは思われなくとも、私の父も入れてあれだけ多くの弟子に心から慕われ、崇高な師として仰がれた漱石も実像でなければならないと思います。そして私共読者が作品を通して見る全く孤独な一人の男性もやはり彼の実像である事に疑いありません。つまり漱石とは誰がどう解釈しても虚像は作り得ない複雑な人間であったに違いないという簡潔な結論でこのペーパーを終わりたいと思います。

(1) 漱石全集、第11巻、「行人」	岩波書店 1956年	41頁
(2) 同上		79頁
(3) 同上		79頁
(4) 同上		116頁
(5) 同上		165頁
(6) 同 31巻書簡集 5		24—25頁
(7) 同 11巻、「行人」		174頁
(8) 夏目鏡子、松岡譲簡録「漱石の思い出」	角川文庫	1982改版23頁
(9) 「行人」		332—333頁
(10) 「漱石の思い出」		306頁
(11) 「行人」		334頁
(12) 松岡譲「ああ漱石山房」	朝日新聞社 1967年	148頁
(13) 「行人」		297頁

討議要旨

長谷川泉氏から、メンタル・ストレスが胃潰瘍などの肉体的病いをもたらすことは今日医学的に確立されているが、逆に胃潰瘍といった病いを宿痾として持っている場合に、それが精神にどのような影響を与えるか、今のところまだはつきりしていない。漱石は、解剖記録が残されているので胃癌でなかったことは確かであるが、病名は残

念ながら松沢病院のカルテが紛失しているために意見が別れている。これらの解明も残された問題であろうとコメントがあった。

これに対し発表者から、そうした医学的な面での解明が進めば、漱石の文学の見方も変化するとお考えでしょうかと質問があり、長谷川氏から、家族につらく当るなどがどこから生じるかなど、やはり見方が変わるのではないかという意見が述べられた。

また文潔若氏から、漱石は中国でも広く読まれ多くの作品が翻訳されているが、初期の「坊っちゃん」や「吾輩は猫である」には社会に対する批判や反逆の精神が見られるが、後にはそれが無くなり、自分の内面の心理的なものを書いています。それには大逆事件が関係があるように思われますがいかがでしょうか、石川啄木は若くして亡くなりましたがもしあのまま書き続ければ小林多喜二のような結果になったかも知れませんし、徳富蘆花も講演ができなくなるなどのことがあったので漱石も病気や家庭内の問題でなしに、そうした明治の時代の影響を受けたのではないのでしょうか、と質問があり、

発表者から、それはよい見方だと思いますが、作家は何か一つの影響だけでなく、いろいろなものによって一作一作変ってゆくものであろうと思います。「吾輩は猫である」はちょうどロンドンから帰って鬱病の起った時でもあり、あのような作品を書くことで自分を出さなくてはならなかったということではないでしょうか、そしてまたほかの落ち着いた時にはそのような作品を書くということにもなったと思われまます。ずっと後の「明暗」にもまた社会的な問題が出て来ていますし、いろいろな経験全体によって、文学的にも変っていったと思います、と答があり、

文氏から晩年のものの方が文学的にも高いものであるということについては自分もそのように思うと意見があり、発表者から、漱石自身も後には「虞美人草」などはいやだといっているし、後の作品の方が文学的に深いものだと思うが、「坊っちゃん」や「吾輩は猫である」を書いたことは悪いことではなくて、それによって、はじめから「こころ」のような作品を書いた場合より、ずっと多くの人が漱石の文学を読むようになったと思うとコメントがあった。

また文潔若氏から重ねて、漱石はロンドンであまり社会にふれず勉強して一度は英

文で小説を書こうとしたということですが、失敗したのでしょうか、と質問があり、
発表者から、もちろん失敗しました。当時の人は森鷗外がドイツ語で数学を学んだ
とか二葉亭四迷がロシア語で勉強したとか、外国語の教科書しかない時代でしたから、
読む力などは非常にあったと思いますが、外国語で文学作品をつくることは誰にとっ
ても不可能に近いことだと思います。漱石も英詩を創っていますがうまくありません
し、彼自身それをよく自覚していたと思います、と答があった。